2023 年 6 月 15 日放送

印象に残る症例②
掌蹠多汗症と過敏性腸症候群を合併した症例に対する漢方治療

たなか整形漢方クリニック 院長　**田中　裕之**

前回は一般的な皮膚疾患である慢性湿疹についてお話ししましたが、今回は全身症状と合併した**掌蹠多汗症**についてお話ししたいと思います。

症例の背景

１７歳 男子高校生　170 ㎝　55 ㎏

現在、他院で **身体表現性障害** の診断で加療中の方です。

具体的には「**下痢型の過敏性腸症候群**」や「**睡眠リズム障害**」につき治療しているとのことでした。

主訴は 5 年前から出現した両手掌、足底、腋窩部の多汗です。多汗のほかに過敏性腸症候群もコントロールがうまくいかず困っているとのことでした。

思春期外来では **SSRI** と**ベンゾジアゼピン系薬**を処方されています。**過敏性腸症候群**については一般的な治療薬である**ラモセトロン**が無効とのことでした。

初診時所見

母に付き添われて受診されました。色白で虚弱ではないが不安そうな顔貌でした。症状の説明などは母と 2 人で確認しながら行いますが、母の干渉は過度ではなさそうでした。発

汗の部位は両掌蹠、腋窩部に限局されるとのことで、手掌と腋窩部は気温が高い時やストレスを感じる場合に発汗が増えるが、足底に関しては常時発汗しているとのことでした。
その他に問診で聴取したのは、

・入浴後にいったん改善することが多い。
・常時末端は冷えている。
・温めると手は温まるが足は温まった感じがしない。
・冬場などは手足を温めると発汗が増えて余計に冷えが悪化することが多い。
・腹部の冷えはそれほどでもない。
・下痢は冷たい飲料をとっても悪化せず、ストレスがかかった時に出現しやすい。
・しもやけがよくできる。

舌診：舌質が薄く平坦　淡紅色・苔なし　舌下静脈の怒張軽度
腹診：腹直筋の緊張が強い　右下腹部・臍下に軽度の圧痛を認める
　　腹部の冷感は特になし
脈診：浮沈中間　実

この症例は明らかにメンタルの問題がベースにあるため「気の問題」を中心に考えた方がよさそうです。舌診からは気虚・血虚・軽度の血瘀の症候が感じられますがそれほど強くはありません。腹診では腹直筋の緊張が強いのが特徴的でした。脈診から体力はそれほど落ちていないと考えられました。

様々な病態が混在しているようでしたが、その中でも特に問題なのは「気滞」と考えました。気滞に伴う血瘀も存在している印象です。これらの所見から方剤を考えると女性なら**加味逍遙散**を選択すると思います。しかし加味逍遙散の適応病名には「女性の…」という性別による限定条件がつくため男性には使用しづらくなっています。さらにこの方のもう一つの主訴である「**下痢型の過敏性腸症候群**」にも対応できる方剤がさらに望ましいと考えました。そこで選択したのが**四逆散**です。

初回処方　四逆散 7.5g 毎食前　2 週間

2 週間後再診時：

手足ともに発汗は改善傾向。効いている気がする。
常時あった足の冷えを感じなくなってきた。下痢の頻度も減少している.
とのことでそのまま続行しました。

3 か月後

多汗も下痢症状もほとんどおさまっているとのことで非常に有効な成績が得られていました。しかし昼夜逆転の生活が続き、学校にはほとんど行けていないとのことでした。漢方で全ての症状が改善したわけではありませんが、生活はしやすくなっているとのことでその後も四逆散を継続処方しています。同時に思春期外来への通院も継続しています。

本症例の特徴を振り返ってみたいと思います

・主症状は皮膚に現れているが、精神面の問題を伴っている。

・皮膚症状だけでなく消化器症状も伴っている。

・発汗の部位が腋窩と末端部に限局している

・冷えているのに末梢を温めると余計に悪化する。

これらの特徴が挙げられます。

本例に使用した**四逆散**は「傷寒論」が原典とされており、柴胡・枳実・芍薬・甘草の４生薬で構成されている比較的シンプルな方剤です。

芍薬と甘草の組み合わせは**こむら返り**に頻用される「芍薬甘草湯」と同じです。つまりこの方剤は「筋緊張を和らげる」効果を持っていることがわかります。筋肉の緊張は精神的緊張を反映していることが多く「緊張して体が固くなる」状態になります。「体が固くなる」とは「筋緊張が強い状態」と考えられます。これが腹直筋に現れると、腹診所見として**腹皮拘急**を認めます。一方で**内臓平滑筋**にあらわれると 消化器系の機能不全 を起こして腹痛や便秘または下痢を呈します。

残りの２薬である**柴胡と枳実**はともに「**気を流す**」効果が強い生薬です。枳実には主に胃の幽門部を緩めて消化機能を改善する「**機能的な気滞の改善**」が期待できます。一方で柴胡には「**精神的な気滞の改善**」が期待できます。柴胡と枳実の組み合わせは大柴胡湯にも含まれますが、「肝気鬱結による気滞症状」に対応します。肝気鬱結は腹診で**胸脇苦満**として認められることが多いストレス症状を反映しています。

柴胡と枳実は解剖学的に考えると「**横隔膜から心窩部レベルでの気滞を改善している**」と考えられます。つまり「**メンタルの問題で横隔膜周囲の動きが悪くなっている状態**」に適応します。「**緊張した時には深呼吸しましょう**」とよくいいますが、精神的な緊張は横隔膜の動きと連動していることが多く、深呼吸により横隔膜を動かすことで 精神の緊張を緩めよう という意図があります。中医学では「**ため息の有無**」で気滞の有無を確認するそうです。「**ため息**」は「ストレスで動きが悪くなった横隔膜」を動かそうとする「無意識の回避行動」だと考えられます。

これらの４薬で構成される本剤は「**精神面の影響が強い消化器症状**」に有用な方剤です。この効果により**過敏性腸症候群**が改善したと考えられます。

さらに本剤の使用目標としてもう一つ重要な所見があります。それが「**熱厥**」と呼ばれる「**体は熱いのに手足が冷える**」症候です。四逆散の「四逆」とは「四肢に気・血が巡らず冷える状態」を意味します。エキス剤にはありませんが **附子・乾姜・甘草**からなる「**四逆湯**」という名前の似た方剤があります。こちらは死にかけているような「**全体の熱が不足しているため四肢も冷える**」状態に使用します。一方で本剤は「**全体的な熱は足りているのに四肢に巡らず、四肢だけが冷える**」場合に使用します。

故に「熱厥」とは「**気が体幹に閉じ込められて、末梢に巡っていない状態**」と考えることができます。本症例の掌蹠多汗症はここに問題があると考えられます。

本症例における「気の状態」を部位別に考えてみたいと思います。「**熱を伴わない発汗は気虚によりおこる**」ことから考えると「**末梢部は気虚の状態**」です。一方で**体幹部**では「四肢に巡ることができなくなった気」が溜まって「**気滞の状態**」となります。この気滞により消化管が機能障害を起こして 過敏性腸症候群を来していると考えられます。つまり「体幹部では気滞、四肢には気虚の状態」であり「気が偏在している」ことを意味しています。さらに悪いことに掌蹠での発汗は末梢の体温を 一層低下 させて**熱厥**が悪化します。

熱厥の場合、体全体の熱が不足しているわけではないので「熱を加えること」で逆効果になることがあります。

まとめ

掌蹠の多汗を訴える患者はメンタルに問題があることが多いです。そのため根本的な問題は皮膚ではなくメンタルにある可能性を考えてアプローチすることが重要です。本例のように「皮膚以外の症状にも目を向ける」ことで適した方剤を選択する手掛かりとなることがあります。現代医学で難渋する場合には見方を変えてぜひ漢方治療を御検討ください。